

左翼は福島原発事故をどう報じたか

小杉山 基昭

『福島原発事故と左翼』（瀬戸弘幸、青林堂、平成29年）を引用し、福島原発事故後、福島県が左翼によってどのような貶められてきたか見ていきたい。

はじめに著者瀬戸弘幸氏について紹介する。本書の著者紹介には

昭和27年福島県生まれ。政治運動家、農業家。日本第一党最高顧問。日本農業助合機構福島支部代表。著者ブログ『せと弘幸 BLOG「日本よ何処へ』』はライブドア政治系ブログで常に上位にランキングされている人気ブロガーである。著書に『有田芳生の研究』『現代のカリスマ、桜井誠』（小社刊）など。

とある。私も著者をブログで知った。ブログを読めば、単なるブロガーではないことがすぐ分かる。常に行動を通して左翼と対峙してきた方である。

はじめにお断りしておかなくてはならない。本文は、ほとんどが引用で、そこを選んだだけが私の作業だった、ということになりそうである。しかもたくさん引用したのに大事な部分が引用してなかったり、また誤用したりしているであろうと思う。引用はできるだけそれと分かるように記載するつもりであるので、どちらについても瀬戸氏と読者諸氏のご寛恕を請う。

さて、最初に結論を述べてしまうと、本書が最も読者に伝えたかったことは、第三章の71～72ページにある次ぎの言葉だったのだと思う。長くなるが全文引用する。（福島民友 平成23〈2011〉年5月1日より）とある記事の直後のものであるから、ここの「当時」はそのころのことである。

当時このようなことが進行していると信じられていた。

- 1) 将来の日本を背負って立つ日本の子供を癌の危険に晒している
- 2) 日本の女性を子供の産めない躰にしている
- 3) 日本の農地を作物が育たない土地にしている
- 4) 日本の沿岸部を魚の捕れない海にしている
- 5) いや、もう人が住めない日本にしている

1) から 5) までのことが散々喧伝されてきたが、今これはすべて誤った情報で拡散されたものであったことが判明した。であるならば、その反省と検証作業が行なわれなければならない。ところが今以てこれが殆ど行なわれていないと実感する。一度広まった情報は今でも一人歩きしている。何とバカバカしいことか？

- 1) 「福島住民は土地や家を出ていく必要はなかった！」
- 2) 「福島の野菜や牛乳は安全だ。魚も同じく安全！」
- 3) 「福島住民は直ちに帰還すべきだ。戻すべし！」
- 4) 「福島は安全であることを宣言すべき！」
- 5) 「胎児にも何の影響もなし、安心して産むべし！」
- 6) 「帰宅困難地域など解除すべきだ！」

と訂正して広げなければならない。

本書とほぼ同時に読み終えた『福島へのメッセージ 放射線を怖れないで！』（須藤鎮世、幻冬社、2017年）の5～6ページにかけて書かれていることが、ガイガーカウンターを持参して福島で約1週間放射線量を測定した研究者の結論である。やはり長くなるが途中までを引用する。

なお「直線閾値なしモデル」は瀬戸氏180～181ページにあるLNTである。

1956年に誤った「直線閾値なしモデル」が勧告されて以来、放射線はどんなに微量でも危険であるという教育がなされてきました。また、マスコミも危険をあおるばかりで、安全であるということはほとんど伝えませんので、放射線に対する恐怖はなかなか消えません。福島における汚染の程度では、人体への影響は無視できます。それどころか、放射線は逆に免疫機能を活性化します。しかし、放射線は怖いという思いがストレスとなり、免疫機能が低下し、健康を害します。放射線による直接の死亡者はありませんが、1300人以上が原発関連死として認定されました。移住や放射線恐怖によるストレスが原因と思われます。

須藤氏の書の最後の章は「福島の汚染程度は心配するだけ損」とある。避難している福島県の人へ伝えたい。

なお、福島の汚染が心配ないことは、先に「健康文化」第51号に「福島県は長生きランドになる」と題し、須藤氏の総説「誤った直線閾値なしモデルの頑迷な適用による膨大な人的、社会的、経済的な損失」（薬学雑誌

135,1197-1211,2015)に基づき私も述べさせてもらっている。

さて瀬戸氏が左翼としているのは「反原発派」である。まず「まえがき」の中の柳美里^{ゆうみり}氏の言葉とそれを受けた氏の言葉を引用する。

「反原発・脱原発のスローガンを掲げて行なわれてきた運動とは、福島の土地や食べ物に対する差別と偏見だった」

在日韓国人作家の柳美里さんに心からの礼を述べたい。これほどまでに明確に反原発運動を福島県民に対する差別と言ってくれた方は、日本の文学界にもいない。反原発派の言ってきたことは「正義」でも何でもない。福島県を差別・中傷^{ちゅうしょう}して潰^{つぶ}すことが目的だった。

ついで「まえがき」の最後の四行を次に引用する。

福島は震災以来、こうした左翼の道具にされ、根拠のない風評被害に苦しめられてきた。もうこれ以上福島を彼らの好きにさせたくない。

左翼の中にも現状の脱・反原発運動に疑問を持つ人もいる。一日も早く科学的根拠に基づいた原発への適切な対応をとることができる状況になることを願って止まない。

多くの左翼は脱・反原発運動に疑問を持たない。つまり多くの左翼は脱・反原発運動派である。ここから反原発派=左翼と、とらえていると考えた。

左翼の言葉は何回も出てくるが、その人達はほとんど反原発運動出身だったので、左翼の由来については以後言及しないことにする。

では、章を追って見ていこう。第一章は「東日本大震災と原発事故」と題し、東日本大震災が平成23(2011)年3月11日の午後2時40分頃に発生したところから始まる。そのとき瀬戸氏は東京にいて福島市へ戻る準備をしている時であった。家族の無事は確かめたが、その時の帰宅はできなかった。地震発生から3日後、氏は羽田空港から福島空港への特別便の飛行機で福島市に行き、ご母堂に会い、実家の落下した屋根瓦の整理にあたりたりした。

第一章は、(2)の「10日間の恐怖と不安の日々、それを今振り返る」を中心に、著者が放射能におびえて過ごしている状況が描かれる。水素爆発があつてから3週間ほどは、福島市だけが異常に高い放射線の数値であったこともあり、

その間とはとくに不安を感じて過ごしたようである。

放射線を不安に思っているのは著者だけではない。そのことを如実に示してくれたのが、民主党政権のときの岡田幹事長と枝野官房長官であると、著者は彼らが相馬市などにやって来たときの格好について述べている。全身を白い防護服に包み、頭からすっぽり被る覆いやマスク、メガネをつけたままだったという。官房長官はテレビで盛んに「直ちに健康に被害を与えるレベルではない」と、放射能について放送した後には必ず付け足していたが、この格好を見れば本人がそのことを信じていないことは明らかであるという。頭に覆いはつけていないが、似たような恰好はカバー表紙面に載っている。

また健康に被害を与えるレベルとはどれほどのレベルなのかは、地元の「福島民友」に載った記事から知られる。

東京電力福島第一原発から20キロ圏外で、計画的避難区域に指定されたのは、飯舘村、浪江村、南相馬の一部の計17地点で一時間辺り、10マイクロシーベルトの測定値が検出された。残る688地点は県の放射線管理アドバイザーが『直ちに健康に問題はない』とする10マイクロシーベルト以下であった。

(福島民友 平成23(2011)年4月14日より)

つまり1時間あたり10マイクロシーベルトを越す数値が、民主党政権が決めた「健康に問題を起こす可能性のある」数値だった。

こうして地震発生以降かなりの期間にわたって瀬戸氏は放射能におびえて過ごしていた。それが解けるのは平成26年あたりからである。そのことは第2章で明らかになる。ここには第1章の最後の部分を全文引用する。

この頃は本当のことを知らされていなかったから、多くの人が放射能におびえていた。しかし、政府は今から半世紀も前に中国やソビエトが大気圏内で行っていた原爆実験で、日本に迄降り注いでいた放射能がこの福島原発事故で発生した60倍であったことを公表しなかった。もしそれらの事実が公表されていれば、多くの人が不安になったり避難する必要などまったくなかったのである。

第二章は、「民主党が隠し続けた放射線量の数値」と題し、福島県の放射能は大したことがないことを説明していく。

出だしは、平成23年3月15日付けの朝日新聞の次のような記事である。

菅直人首相は15日午前11時すぎから首相官邸で国民に向けたメッセージを發し、東京電力福島第一原子力発電所2号機の事故で放射性物質が屋外に放出されたとして、同原発の半径20キロ以内からの避難を改めて呼びかけるとともに、同20～30キロの圏内では屋内に避難するよう要請した。

福島県民は当時、疑心暗鬼になっていたし、放射能に怯えていた、とある。それが払拭されていくのは、平成26年あたりからのようだ。

著者は、「ママレポ通信」平成26（2014）年9月24日号を引用している。長いので内容を私なりに要約して示す。

伊達市の市政アドバイザーである多田順一郎氏は、自身が子供だった1950年～1960年代には大気外核実験をやっていて、ストロンチウム90やセシウム137が降り積もり、それらの積もった野菜を食べて自分たちは育った。セシウムが入ったミルクを赤ちゃんに飲ませてホールボディカウンターで測り、セシウム137が体内に蓄積されていく実験もされている。その赤ちゃんも、自分たちも現在健康に存命している、として暗に現在の汚染は大したことがないのだと述べた。

瀬戸氏は、平成27（2015）年7月15日の朝日新聞が、ストロンチウム90の観測値が「最大、60年代の60分の1」と報じた、としている。ただ60分の1がどの数字をさすものなのか、私には分からないでいるが、肝心なことは現在60代以上の人は、10代の頃には大量の放射性物質を浴びて生活していた。体内にも現在とは比較にならない程のセシウムが蓄積していた。それでも現在健康である、ということである。

そういう事実があるのに、反原発派は福島の野菜や果実は危険だと主張している。そのため福島の農産物の放射能レベルは、世界的に認められている食品中の放射能レベルである国際基準の10分の1にされてしまった。その結果、国民はさらに放射能に対して不安な気持ちになるという影響が出た。

さらに、マスコミはこれまで原発の被害を大げさに書いてきた。原発関連死なる言葉を造って、原発事故で死亡したかのように装ったりもした。しかし原発の事故で死亡した人はいない。原発事故後4年から5年過ぎると、福島の子ども達に甲状腺癌が多発すると言われてきたから、平成27（2015）年3月には反原発派が固唾を吞んで期待していたが、4年目を迎えても、甲状腺癌が見つかったなどの報道はなかった、ということで第二章を終えている。

私は、ひとわり第七章まで読んでみて、ほぼここまでで本書の言わんとしていることのかなりの部分が出てきたと感じている。ここから先はページも大分押してきたので、章ごとに短く要約して本文を終わらせることにしたい。

ところで、第二章はベクレルという単位で述べ、第一章はマイクロシーベルトであった。環境中ではベクレルの値を使っては測れないということであろう。

第三章は、「福島放射線と安全」と題し、福島は安全であることを例示している。

平成27(2015)年6月28日の朝日新聞の次の記事を引用する。平成26年に行った実験の結果である。同じ線量計を各地の高校生が2週間身につけ、その累積線量から年間の線量を計算した。各地とも全く同じレベルであった。

高校ごとの生徒らの数値を低い順に並べて真ん中にくる『中央値』は、福島県内が年0.63~0.97ミリシーベルト(各地の値は省略)、県外は0.55~0.87ミリ(同略)、海外が0.51~1.17ミリだった。

ページは少し後戻りするが、ホールボディカウンターを用いて、福島県南相馬市や三春町の子どもの体内放射線量の測定も行っている。放射性セシウムは検出されずその内部被ばくは心配ないという。

氏は、第2項に「女性が子供を産めない体になる……などは最も卑劣な嘘だった」と題して書き、当時このようなことが進行していると信じられていた、と5項目を挙げている。それは本文の当初に示したので省略する。

第四章は「反原発漫画『美味しんぼ』の風評被害」と題して書かれている。

平成26(2014)年4月28日発売の「ビッグコミックスピリッツ22・23合併号」の「美味しんぼ」における描写が、次のように批判されているという。

福島第一原発の見学から帰った主人公らが原因不明の鼻血を出したり疲労感を覚えたという描写があり、双葉町元町長井戸川克隆氏も登場して同様の症状があるとして「福島では同じ症状の人が大勢いますよ。言わないだけです」と語った。作中では医師が「放射線と鼻血を関連付ける医学的知見はありません」と語る場面があり、両者を直接関連付けてはいないものの、「福島に行くようになってからひどく疲れやすくなった」と登場人物が話すシーンなどがあり、不

安をあおっていると批判されている。

（「ねとらぼ 平成26（2014）年4月28日より」の一部改変して抜粋）

瀬戸氏が特に問題とする点は、漫画の中では大勢の人が鼻血を流して沈黙しているなどと描いていたことである。

詳しい経緯が説明されるが、平成26年5月17日（土曜日）に、氏の呼びかけで、発行元の小学館前への抗議行動になり、60名からの参加者があったという。

最終的には休載の発表になったが、遅きに失する感は否めない。福島県民に与えた影響ははかり知れないと氏は書いている。

第五章は政治家の反原発運動である。細川護熙と小泉純一郎がかかわっている。小泉元首相は放射性廃棄物をどう処理するのか、などと問うているというが、瀬戸氏は、両者とも政治的復権を目指すために言い始めたとしている。

天皇陛下に手紙を手渡した山本太郎参議院議員については、「福島の野菜は放射性廃棄物」と言ったり「ベクレているかな、国会の弁当は」と言ってみたりしたことに怒りを禁じ得なかったという。天皇陛下は福島で採れたお米を「少し、いただきますか」といわれたので、原発事故後初収穫の広野町の新米をお住まいに届けたという。

第六章は「原発再稼働と反撃の万願寺デモ」と題している。金曜日の夜に東京・永田町の首相官邸前で行われていた「原発への抗議活動」に対して抗議しようとする万願寺デモについて書いている。原発への抗議活動は、平成26（2014）年5月2日で100回目を迎えたという。その中心になったのがミサオ・レッドウルフという女性である。その人が日野市万願寺に住んでいるので万願寺で、「原発への抗議活動」に対しての挑戦的デモを行い、総勢130名以上の参加があって成功した、という報告の章である。

第七章は、「農業と風評被害者組織『脱原発テント』」と題して、輸入食品の放射能は据え置いて、日本産の食品のそれを原発事故以後下げたことの矛盾などについて書いている。また『福島原発風評被害者の会』を設立したという。「脱原発テント村」は2016年8月21日に撤去されたが、風評被害との関係については私には読み取れなかった。

（茨城大学名誉教授）